

## 予測不可能な社会に「新たな道」をとともにきりひらこう

札幌学院大学人文学部こども発達学科 学科長 井上大樹

### 1. 入学おめでとうございます

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。ようこそ、札幌学院大学人文学部こども発達学科へ。学科教職員一同を代表し、本学科の一員に加わることに歓迎の意を表します。本学科は2006年4月に開設され、13年目を迎えます。これまでも多くの先輩たちが北海道内の小学校をはじめ、こどもに関わる仕事で活躍をしています。また、保育士養成課程は今年で5年目を迎え、今年3月に初めての卒業生を送り出し、保育所や児童福祉関係の仕事で新たな一歩を歩もうとしています。しかし、人間で「13歳」といえば思春期真っただ中、どんな大人になるのかは未知数といったところでしょう。13期生のみなさんには、先輩たちが切り開いていない道にもぜひチャレンジしてほしいと期待しています。

### 2. 若者の学びの道を切り拓いた本学の歴史

本学の歴史の始まりは、終戦直後の食べるものにも困る時期に時の若者たちが「学びの場」を求めてつくった「札幌文科専門学院」です。この大学自体が若者自身で道を切り拓いてできたものであり、「DNA」とも言ってもいいその精神は代々の学生や教職員に引き継がれています。本学科の設立以前のルーツは人文学部人間科学科にさかのぼります。「夜明け前」というべき1990年代の教員では北海道のフリースクール先駆けとなる「北海道自由が丘学園」を設立した鈴木秀一先生がおります。卒業生では、学生時代には車いすを途上国に届けるNPO法人「飛んでけ車いす」の会の立ち上げに関わり、現在では多くの小規模公共施設の運営を受託している「ワーカーズユープ」北海道事業本部副責任者を務め、NPO・非営利組織を職業として社会的に認知させる一翼を担った下村朋史さんがいます。これらはほんの一例であり、本学からは社会を切り開く道が様々に伸びています。

また、本学科ができた経緯も、本学でまだ小学校教員免許が取れなかった頃、卒業後に通信制教育で資格を取り「教師」の夢を実現させた先輩たちの労苦なしで語ることはできません。保育士課程もかつて多くの先輩たちが今よりもはるかに難しかった「保育士資格試験」の受験に、寝る間を惜しんで勉強に励んだ「汗と涙」の結晶と言えるものです。このように、本学は多くの人々が切り開いた道でできているのです。これは、今のが完成形ということではありません。今度は、皆さんが「学びに向かう姿勢」でもってその道を切り開く番です。

### 3. 『君たちはどう生きるか』と日本の教育

最近、宮崎駿がアニメ映画化を発表して話題になっている本に吉野源三郎『君たちはどう生きるか』があります。この著書は1937年刊行、「一人ひとりが主体的に生きること」を説くという日本が戦争一色に染まる時代にあつては異色ともいえるべき内容であり、戦後の若者たちには必読書と言われた時期もありました。実は、この本のもう一つの主題には「今ある社会をどう認識するのか」という「どう生きるか」以前の学びの重要性を説いていると言われていています。その当時の「学び」は「教養」論というべきものであります。さて、本学はこれまでも教養教育を重視してきました。直接の関連性は明らかになっていませんが、本学の設立の精神はこの本の趣旨とも合致することから、もしかしたら、本学の研究と教育の蓄積は『君たちはどう生きるか』に対する一つの解であると言えるかもしれません。

さて、今の日本及び世界は「予測不可能な社会」の真っただ中にあると言われていています。今度の新学習指導要領では、全ての学校で「予測不可能な社会」を生き抜く「主体的・対話的で深い学び」を柱にすえます。本学科の卒業生は直接、間接にこの新しい学びを子どもたちに与える側にまわることでしょう。その前に、学生時代で「主体的・対話的で深い学び」を経験しなくては、これから教育・保育者としてはやっていけない。大学で教育・保育の「こども発達」を学んだ証は、「主体的・対話的で深い学び」をどれだけできたかに尽きると私は考えます。その点では、本学科には「受け身の学び」という意味の「座学」はありえません。本学の大学生活を主体的に過ごす中で、予測不能な社会をどう生きるか、あなたなりの答えと実現するヒントを得てほしいと思います。本学は一人ひとりの学びを全教職員（各学部・学科、部課、センター一丸）でよりそい、応援します。

#### 4. 保護者の皆様へ

保護者の皆様、この度はご子息、ご息女のご入学おめでとうございます。本学、本学科への進学に際し多大なるご支援を頂き、深く感謝申し上げます。民法では18歳を成人に規定する動きがある中、学生時代というのは「大人」なのか「子ども」なのかが不明瞭な分、大人はどのように向き合えばよいのか悩むことも少なくないかと思えます。私が以前、事務局を務めた「さっぽろ子育てネットワーク」では、中学・高校・高卒後の親たちが自分の子育ての悩みややりがいなどを語る子育てサロンの思春期版がありました（子育てサロンは乳幼児の子育て支援の定番事業）。そこでの合言葉は「手を離して目を離さない」でした。子育てのゴールは「自立」であることをよく表している言葉ではありますが、そう簡単なことではないと思えます。本学のスローガンは「Walk Together for Future」。私たち教職員はご子息、ご息女の自立を願う保護者の皆様とも手をたずさえてともに歩んでいきます。今後ともよろしくお願いいたします。

2018年4月2日